

キリスト者にとって信仰の中心は、主イエス・キリストの十字架です。信仰者にとって、主イエスの十字架は、神の独り子である主イエス、つまり、神と等しい方が、神から離れて歩んでいる私たち人間の罪をご自身の身に負い、私たちの身代わりとなって死んでくださったことを示しています。

主イエスが神の子であるという信仰の中心は、人間にとって躓きともなります。一人の人間として世を歩まれた主イエスが、神の子であるということは簡単に受け入れられることではありません。では、そのような躓きを越えて、主イエスこそ真に神の子であるとの信仰はどのようにして与えられるのでしょうか。

確かに、主イエスのお語りになった言葉の中には、含蓄に富んだ、座右の銘にしたいような言葉が幾つもあります。又、驚くような癒しや奇跡の御業があります。しかし、聖書はどれだけ主イエスの偉大な教えや御業を見ても、だから主イエスが神の子、救い主という信仰につながって行ったのではないことを教えています。むしろ、癒しや奇跡を見て人の心に起こったものは最初、驚きがあったもののやがて妬みや憎しみに変えられ、ついには主イエスへの殺意と変わっていったのです。主イエスが神であるという信仰は、主イエスの十字架の出来事によって示されます。そのような意味で、十字架は、信仰の中心であると共に、信仰の出発点でもあると言えます。

私たちを罪から救い、私たちに主イエスこそ神の子であるとの信仰を生む主イエスの十字架、神の子の死とは、どのようなものなのでしょう。主イエスが十字架で死んだということは、主イエスが苦しみを受けたということに他なりません。十字架とはどのようなものかを知ることは、主イエスのお受けになった苦しみとはどのようなものかを知ることもなります。主イエスが十字架で受けた苦しみとは、ローマによって行われた十字架刑という残虐な刑罰によって肉体的に苦しめられたということではありません。聖書は、主イエスが、二人の犯罪人と一緒に十字架につけられたことを語っています。残虐な刑罰から来る肉体的苦痛ということだけを見つめるならば、この二人の犯罪人も、主イエスと同じ苦しみを一緒に受けたわけです。しかし、主イエスが十字架で受けた御苦しみはもっと深い所にあります。それは、33節に記されている、主イエスが十字架につけられた時の様子を見ることによって分かります。そこで、主イエスは、「エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ」と叫ばれました。『わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか』という意味です。主イエスは、十字架に至る苦しみの中で、それ程多くのことを語ってはいません。むしろ、沈黙し、ご自身を殺そうとする人々に身を委ねて、神様の御心の実現のために歩いて来られました。その中でこの叫びには、主イエスの十字架の苦しみが明確に表されています。主イエスの苦しみとは、父なる神によって見捨てられるということであり、それまで結ばれていた神様と主イエスとの間の完全な愛の交わりから切り離されることなのです。もっとも親密で親しい関係にあった者がもっとも遠い存在に置かれるばかりか見捨てられ、呪われた存在となること。もともと薄い人間関係にあった人は引き離されてもさほどショックを受けません、しかし主イエスの場合は全く違います。ここにこそ真の闇、真の苦しみがあると言えます。主イエスの苦しみは、この十字架の叫びに集約されているとも言えます。

この主イエスの十字架の叫びを聞くと、この叫びは、私たちが叫ぶ叫びでもあるということをおぼやされます。主イエスの十字架の叫びは、詩篇22篇の詩人の叫びです。1節「わが神、わが神。どうして、私をお見捨てになったのですか。遠く離れて私をお救いにならないのですか。」この言葉は、苦しみの中に置かれた詩人、つまり人間が、神に向かって発しているものです。主イエスは、この詩篇の言

葉をもってご自身の苦しみを表現なさったのです。私たちは、この世で様々な苦しみを経験します。人間関係の様々なトラブルに遭遇します。自然災害に見舞われます。又病を患い、日々肉体の衰えを経験します。死の現実を通して愛する者との別れを経験します。そのような苦しみの直中にある時に、私たちは、深く嘆き、つぶやくことがあります。どうして、私はこのような苦しみに遭わなければならないのか。神は私を見捨てられたのではないかと思うのです。私たちが、この言葉を叫ぶ時、それは、確かに、神に対する必死な求めです。しかし、私たち人間が、この叫びを叫ぶ時、心のどこかで、神を裁いています。神がいるのに、こんな理不尽な苦しみがあってはならないという思いがあるのです。何故、このようなことをされるのかという怒りがあるのです。そして、そこにこそ人間の罪が潜んでいると言えます。

この人間の罪の本質は、まさに、主イエスの十字架の場面で、その十字架を囲む人々の姿に明確に現されています。十字架の周りにいた人々の中には、主イエスの叫び声を聞いて、「そら、エリヤを呼んでいる。」という者がいました。エルが神でありイとは私のという意味です。「エロイ、エロイ」という言葉は、「エリ、エリ」とも発音される言葉ですが、それを旧約聖書に登場する預言者、エリヤを呼ぶ叫び声として聞いたのです。ちなみにエリヤはヤがヤーヴェ（主）ということで「主こそわが神」ということです。偉大な預言者を呼び出すことによって、自分自身の救いを求めているのだと思ったのです。更には、「エリヤがやって来て、彼を降ろすかどうか、私たちは見ることにしよう。」と言う者がいたとあります。奇跡の生還劇のようなことが起こるかどうかを確かめて、主イエスが神の子であるかどうかを判断しようとしているのです。神を求める人間の思いの背後に、神を試す人間の罪があるのです。

そもそも私たち、人間の罪の本質は、神さまとの関係が壊れているということにあります。神様との関係がねじれている、それも 180 度ねじれてしまっただけになってしまっているのです。私たちの主とされる神さまを本当に主とあがめるのではなく、自分自身が神様の主人になり、神様は、このような方であるべきだと、神様の姿をイメージする。そのようにして、真の神様を主と崇め、礼拝することから離れていってしまうのです。

しかし十字架上における、「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか」と言う、主イエスの叫びは、不満を漏らし、神を裁く言葉ではありません。私たちの叫びとは全く違います。私たちが神様から見捨てられたと叫ぶことと、神の子である主イエスが、「なぜわたしをお見捨てになったのですか」と叫ぶことには根本的な違いがあります。主イエスは、ご自身、神であり、何の罪も犯していないにもかかわらず、神に見捨てられたのです。そして、十字架において神の子が人間の裁きに合うということを通して、根本的には罪人を裁く、神の裁きをお受けになったのです。この十字架の苦しみを、宗教改革者のルターは、「神が神と戦った」と表現しました。神様は、罪人の罪を見過ごすことにはない義なる方です。そのような意味で、罪人をしっかりと裁くお方なのです。しかし、同時に、神さまは、その愛故に、人間を救おうとされる方です。人間を裁く神と人間を救う神が葛藤されているのです。このお一人の神が、ご自身の中での葛藤の結果が、主イエス・キリストの十字架の苦しみののです。「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という叫びには、この神の葛藤の中での苦しみが訴えられていると言って良いでしょう。そして、それこそが、罪に対する裁きを確かに実行しつつ、人間の救いを成し遂げてくださった神様の救いのご計画なのです。主イエスの十字架には、神様の裁きと救いが同時に表されていると言って良いでしょう。

人々は、主イエスが十字架からおろされるのではないかという好奇心から十字架を見つめていました。

しかし、そのようなことは起こりませんでした。結局、主イエスは、「大声を出して息を引き取られた」のです。主なる神は、ご自身の一人子を、自ら主人となって神を試そうとする人間の裁きにご自身を委ねてくださるという形で、主イエスに罪に対する裁きをお下しになりました。38節には「神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けた。」とあります。この垂れ幕は、神殿の至聖所と聖所を隔てていた幕です。至聖所というのは、年に一回大祭司だけが犠牲の動物の血をもって入る場所です。つまり、それは、聖なる神さまと人間が隔てられていることを表すものなのです。しかし、主イエスの十字架の死によって、人間の罪によって隔てられていた、神と人との関係が、つまり文字通り壁のような幕が真っ二つ切り裂かれたことを表しています。イエス様の死によって隔ての幕が無くなってしまったわけですからもう何をもってしても神様との関係離れてしまうことはないのです。

主イエスが苦しめることによって、神と人間の間の隔たりを取り去ってくださった。そのことを示される時に、真に「この方はまことに神の子であった」との告白が生まれます。聖書は、その告白を39節に記しています。この告白は、ローマの百人隊長によってなされました。百人隊長というのはユダヤ人ではありません。これまで、主イエスの御業に触れたことも、御言葉を聞いたこともありませんでした。そのような意味で、信仰からは最も遠い者であったと言っても良いでしょう。主イエスの裁判の後、官邸で、ローマ兵たちは、主イエスに暴行を加え、侮辱しました。この百人隊長も、当然主イエスを侮辱した人々の中にいました。彼にとって、主イエスは、自らが侮辱し、暴行を加え、十字架に付けた者でしかありません。主イエスが十字架につけることも職務の上で自分の勤めを果たしたに過ぎず、主イエスとは何の関係もありません。しかし、何の抵抗も口答えもせず痛めつけられてゆくイエス・キリストが居て、そして傍らには痛めつける百人隊長がいる。その中で、彼は気づいたのです。「何の罪も犯していない人を痛めつける自分とは何者なのか？ 結局、私の罪がこのような悲惨な状態を生み出しているということ。では何故、この人はこの状況を甘んじて受けているのか？ 受けるだけでなく、父よ、彼らを赦したまえ、彼らは何をしているのか分からないのですと言われる。つまり、そんなに目に遭いながらも、あなたが犯したひどい罪のことを気にしなくても良い。あなたが犯した罪の罰を私が受けているからおっしゃるのです。このお方は私が受けなければならない罰を代わりに受けている。それは実は私の自らの手によって加えた苦しみによって、神が真の救いを成し遂げてくださっていることを悟ったのです。それ故、「この方はまことに神の子であった」という信仰の中心とも言うべきことを彼は告白したのです。

私たちは、日々、この世の苦しみの中で、右往左往します。神に「あなたは何をしているのか？ 何もしてくれないではないか！」「私は見捨てられた」と叫びながら歩むことがあると思います。理不尽なことのゆえに神様に文句を言いたくなることもあるでしょう。しかし、そこで、主イエスの十字架の前に立つとき、どんなに正しいように見えていた私の不平不満が、怒りが、殺意が結局は自分の罪が明らかにされることとなり、そのための主イエスの十字架の死であることを示されるのです。私自身の罪のために十字架によって神様との間の隔てが取り払われているという恵みの中で、初めて、主イエスが神の子であるとの告白をなすのです。

あなたはどうか？ あなたの罪が主イエスを十字架につけたと受け止めておられるでしょうか？ そうでないならあなたと主イエスとは何の関係も無いということになります。主イエスの十字架は信仰の中心であると共につねに出发点であることを覚えましょう。